

説教 **復活を信じるってどうかしてる？** 2022年4月24日(日)

マルコによる福音書 12:18 ~ 27 (新共同訳:新約 p86/和英聖書:新約 p114)

神さまの

目に見えること(現象)を信じる。これが私たちの常です。しかも、相手の都合ではなくて、自分の自由なタイミングで見ることが出来る。そういうものを私たちは信じています。人の心は見えませんが財産は見えます。だから、世の中でお金だけは信じる事が出来る！という人もいます。教会の存在はどうでしょう。教会は、神を語る者がいてそれを聴く者の群れです。そして、やがて教会が礼拝堂を立てて、地域に存在を知らせます。だから教会という群れも(礼拝堂も)も目に見えることなので、その存在自体は信じる事が出来ます。ところが、長い教会史の中で教会が存在し続けている根拠は、イエス・キリストの復活が起こった故なのに、「復活についてはどうも分からない！信じられない！」という人もいます。それは多くの場合、目に見えるものが全て！目に見えないものは信じない！という人だと思えます。教会に行っている人でも、「聖書はだいたい理解できるが、キリストの復活が分からない！」という人もいます。例えば、「聖書はキリストが死んで三日目に復活したと書いているが、科学的・生物学的にあり得えない！」とか。また、「それが仮に事実だとしても、2000年前に地球の裏側で起こったキリストの復活が、今の自分に関係ない！」とか。あるいは、「もしこの自分が復活するとしたら、現実的にややこしい問題が起こる！」とか。ユダヤ人がイエスさまの前に持ち出した問題も、その類のことです。「律法は、ある人が妻をめとり、子が無くて死んだなら、弟がその女性を妻にして、兄のために子どもを設けなければならないと定めています。その定めに従って7人の兄弟が次々に1人の女性を妻にした。復活の時、彼女は誰の妻になるのか？」と。律法に従うならば、そういった矛盾が生じるのだから、故に「だから復活はないのだ！」という理屈が彼らの主張です。

激しさを

これに対するイエスさまの答えは問題の核心を突いています。「あなたたちは聖書も神の力も知らないから、そんな思い違いをしているのではないか。」要するに、「そういうことを言うのは、あなた方は聖書も神の力も知らないからだ！」これがイエスさまの答えでした。即ち、聖書に記されている神さまとその業や力を理解できるならば、そんな疑問は出てこないはずだ！ということです。確かに、「教会を信じる事が出来ても、復活については理解できない！」といった疑問もすべて、神さまご自身をそっちのけにして出てくる疑問です。そこが、昔も今も「復活は理

解できない」という議論の致命的な欠点なのです。イエスさまご自身も、ご自分の復活を確信しておられました。それは、「自分が神の子だから凄いパワーがあるのだ！神の子だから特別に、不死身の身体を持っているのだ！」という意味ではありません。イエスさまは、ご自分を遣わす父なる神さまのご計画に対して、ただ従ったわけではありません。激しく従ったのです。即ち、十字架の上で死ななければならないほどに激しく、イエスさまは完全に父なる神さまの御心に従ったのです。これほどまでに激しく、御心に従い通す自分を、神さまが死の中に放置して置かれるはずがない！だから復活する！これがイエスさまの確信であったのです。

知ってこそ

イエスさまの復活は単なる出来事ではありません。この出来事もまた、父なる神さまの激しい思いに突き動かされるようにして起こされる出来事です。例えば、ヨハネ福音書3:16には、こういう聖句があります。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」皆さんの中で、ご自分の大切なご家族の1人を死の世界に送ることはしないと思います。ウクライナの映像が出るたびに、モザイクがかかった一般市民の遺体が見えます。心が傷みます。あの遺体が、もし自分の親だったら！もし自分の子どもだったら！親しい友人だったら！そう思うと傷つきます。自分の家族でなくとも、まだこれから楽しく豊かな人生が待っていたであろう人々が、一瞬にして銃弾に命を落としているのです。人間の罪の行方とか、人間の妬みの縮図が、現実となってウクライナで起こっているのです。そのドロドロとした人間の醜い罪の世界へ・残虐極まりないこの世界へ、我が子を送り込んだお方がいる。それが御子イエスの父・神です。「神は、その独り子をお与えになったほどに、私たちのこのドロドロしてとても醜い世を愛された。それは、この独り子を信じる者がたといドロドロした醜い罪を持っていようとも、その罪人が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」世界中の人々を1人でも滅ぼしたくないという神さまの思いが、イエスさまの十字架の死と復活の出来事を引き起こしたのだ！とヨハネによる福音書は書いています。だから、私たち1人ひとりに注がれているこの神さまの思いの激しさを知らずに、復活を理解することは出来ないのです。神さまが、「わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」とモーセに語られた時、アブラハムもイサクもヤコブも、すでに死んで、この世にはいませんでした。しかし例え彼らが死んで、この地上にはいなくなっていたとしても、神さまは彼らを忘れておられないのです。「わたしは今でも彼らの神なのだ！」と言っておられるのです。「彼らはわたしのもの！」と言っておられるのです。彼らに対する父なる神さまのこの思いの深さの中に、復活の希望があるのだ！とイエスさまは言われるのです。